

(a) 表-1, 表-3 にかがにものもすべて参考文献だが, ここでは  
さうして特に直接本文の記述にかかわるものもあけておきたい。

第二章 引用及び主要参考文献

会田雄次 1966 『合理主義』 講談社

———— 1970 『日本人の意識構造』 講  
談社

———— 1972 『日本の風土と文化』 角  
川書店

———— 1973 『事実と幻想: 鏡日本人  
の意識構造』 講談社

荒木博之 1973 『日本人の行動様式』  
講談社

Brezinski, Z 1972 The Fragile Blossom  
crisis and change in Japan

( 大船人 - 訳 『ひよわの花

日本 : 日本大國批判』サイ

マル出版会 1972 )

土居健郎 1971 『甘之』の構造』弘文堂

—— 1975 『甘之』雑稿』弘文堂

Gayn, M 1948 Japan Diary William

Sloane Associates Inc. ( 井本

威夫 訳 『ニッポン日記』上下

筑摩書房 1951 )

Gibney, F 1975 Japan : The Fragile

Superpower ( 大前正臣 訳 『人

付城, 人は石垣』サイマル

出版会 1975 )

Guillain, R 1969 Japon - Troisiem grand

Edition du Seuil ( 井上勇 訳

『大三の天國・日本』朝日新

聞社 1969 )

芳賀矢一 1907 『国民性十論』富山房

喬

大

学

大

学

浜口恵俊 1972 「世界の中の日本文化を

考える。60冊の本」(梅棹・多

田編 論集・日本文化3『日本文

化の表情』所収)

———— 1973 「日本人論の系譜」(飯

島宗一・鯨田豊之編『日本人と

何か』日本経済新聞社 1973

所収)

梅田清之 1974 『梅干と日本刀』祥伝社

———— 1975 『続・梅干と日本刀』祥伝社

飯塚浩二 1952 『日本の精神的風土』

岩波書店

生松敬三 1963 「戦前の日本文化研究」

『思想』 1月号

イギャ・ベンダサン 1970 『日本人とユ

ギャ人の』山本書店

石田英一郎 1961a 「愛と憎しみの文化」

『自由』 1月号

———— 1961b 「永遠の日本人」

『中央公論』 7月号

喬

大

学

(いすれも石田(1965)(1970)

に再録)

—— 1965 『東西抄』 筑摩書房

—— 1970 『人間と文化の探求』 文芸

春秋社

神島二郎 1975 『日本人の発想』 講談社

河崎一郎 1969 『素顔の日本』 二見書房

加藤周一 1956 『雑種文化論』 講談社

(1973 講談社文庫版)

川島武宜 1950 『日本社会の家族的構成』

日本評論社

木村敏 1972 『人と人との間』 弘文堂

岸田国士 1947 『日本人畸形説』 (復初

文庫版『日本人畸形説』 評論

社 1968)

九鬼周造 1930 『「いさ」の構造』 岩波

書店

桑原武夫 1973 『日本文化の生み出した

もの』 (飯島・鯖田編 『日本

人と何もの』 日本経済新聞社

1973 所収)

丸山真男 1961 『日本の思想』岩波書店

—— 1966 「個人折出のさよごまの  
パターン」(細谷千博編訳『日

本における近代化の問題』岩波  
書店 1966 所収)

南 博 1953 『日本人の心理』岩波  
書店

—— 1957 『体系社会心理学』光文  
社

—— 1963 『社会心理学の性格と課題』  
勁草書房

—— 1965a 『意識革命』講談社

—— 編 1965b 『大正文化』勁草書房

—— 監修 1965c 『社会心理史』誠信書  
房

日本学術会議第一部編『文科系文献目録XV

1963 - 日本人の性格研  
究篇』

Norbeck, E & DeVos, G 1961 "Area

Study: Japan" in F. Hsu  
(ed.) Psychological Anthropology  
Dorsey

———— 1972 "Culture and Personality:  
The Japanese" in F. Hsu (ed.)  
Psychological Anthropology. (new  
edition) Schenkman

森口兼二・浜口恵俊1964「日本文化研究の展  
望と文献リスト」『思想の科学』  
4月号

オ-テス・ケ-リ 1968 『日本との対話』  
講談社

笠信太郎 1950 『ものの見方について』  
河出書房 (角川文庫版  
1957)

———— 1961 『なく7たなくせ』  
暮しの手帖社

鯖田豊之 1964 『日本をみなおす』  
講談社

———— 1966 『肉食の思想』 中央

公論社

—— 1972 『文明の条件』 講談社

—— 1974 『風土と文明』 日本経済新

聞社

作田啓一 1967 『恥の文化再考』 筑摩

書房

—— 1971 『共同態と主体性』 (

『近代日本社会思想史II』 有

斐閣 1971 所収)

庄司興吉 1974 『現代日本社会科学史序

説』 法政大学出版局

島田一男 1962 「『日本人のパーソナリ

ティ』 研究の概観」 『年報社会

心理学』 Vol. 3

祖父江孝男 1959 「米国人類学者による

日本研究 - 展望と評価 - 」

『民族学研究』 Vol. 22 No. 3

- 4 pp. 141-48

高島善哉 1966 『現代日本の考察 - 民

族・風土・階級』 竹内書店

臼井吉貞編 1959 『現代教養全集』 日本人  
人』 筑摩書房

米山俊直 1972 「日本人の国民性」 (社会学セミナー 4 『社会心理・マスコミュニケーション』 有斐閣 1972 所収)

—— 1973 「日本人の国民性」 (飯島・鯨田編 『日本人とは何か』 日本経済新聞社 1973 所収)

米沢 弘 1974 「方法論からみた日本人

論」 (日本人研究会編 『日本人研究』 No. 1 日本人は  
どう変わったか 至誠堂 所収)

和辻哲郎 1935a 『風土』 岩波書店

—— 1935b 『続・日本精神史研究』 岩波書店





一  
喬  
大  
学



### 第三章 “日本人の「国民性」論 の主要論点

本章では、前章でとりあげたような多くの日本人論、日本文化論の中で繰り返し指摘されてきている日本人の「国民性」や日本文化の特質についての、いわば最大公約数的な論点、一般的特色について検討し、その後で、各論として具体的なトピックについて論じてい。

(a) 祖父江孝男 (1973) p.16

上に述べたような観点から、日本人の“中核的特色”を指摘したものに、祖父江(1973)の論考があるのだ、まずこれからみていきたい。ここでは、日本人の中核的特色として次の四点があげられている。

(a)

- (1) タテ社会性
- (2) 他人指向性・集団帰属性
- (3) 依存性・甘え
- (4) 生活における自然主義

まず、(1) のタテ社会性であるが、これに

ついでに、後に“日本的人間関係”の考察のところで述べることにしたい。ただ、祖父江は、タテ社会性、従ってヨコ関係の不在というところを、市民としてのヨコの関係が成立しにくいとか、公衆道徳の欠如ということに解釈しているが、これらは、中核がいう本来の意味でのタテ関係・ヨコ関係の議論とは、いさかレベルを異にするように思われる。確かにそういう論点も含まれるが、それが主要なポイントではない。

(A) 朝日新聞「全国世論調査」結果 1972. 1. 3  
以下短所として、すこあろ(27%)責任感あまい(21%)とつづ。一方  
長所としては、勤勉(47%)器用(37%)の順である。(回答は2項選択)

むしろ、さういって、市民的連帯の不在や、公衆道徳の欠如が、日本人の間の顕著な特徴ではないというのではなく、それらは、むしろむしろなく、さうしたものの一つではある。例えは、これは世論調査の結果がある。日本人の国民性の「よくない点」をたずねた場合、その第一位は、「公共心のなれこと」(36%)であった。このように自らも十分認めらる短所ではあるわけである。

(2) の他人指向性・集団帰属性については

改めて検討する必要もないほど高度のコンセンサスの成り立、この論点にとい、さうい。少なくとも、いわゆる日本的「国民性」論において、さうである。荒木(1973)が、他律性・集団論理性と名づけたものが、まさにこれにあたるし、呼び名こそ違え、多くの論者が、ことごとく指摘してゐる特徴である。そして、これらは、彼らの説明原理によれば、農耕民の生活様式の産物として、農耕民の「ア・パーソナリティー」に帰されたのだが、「

(2) 作田啓一(1967)及び同(1972)。恥心問題への種々のアプローチについては井上忠司(1970)\*が参考になる。

\*井上忠司(1970)『恥心の社会心理学序説 - 研究アプローチ展望 -』  
『人文科学』29 京大人文科学研究会

「恥」や「世間」、「世間体」といふ問題との関連で、よりきめ細かな検討を加えていくことが必要だと思われる。

特に、「恥心」については、ベネディクトのいわれる「恥の文化」の規定に対し、それが「恥の文化」の一面しかあふ、という、公恥に対する私恥 - 羞恥 - の側面も視野の中に取り込んだアプローチが必要であること主張する作田の批判などが、その方向を示唆してくる。

(3) の依存性、甘えは、(2) の特性と裏腹のもので、ある意味では両者を切り離して論じることはできない。また、これは、土居の『「甘え」の構造』の主要な論点でもあふわけだが、「甘え」ということは「カクローズ」アップされる以前にも、集団埋没性、個の未成熟、自主性・主体性の欠如として、繰り返して指摘されたきた特性であった。

(4) の生活における自然主義というのは、いわば日本人の自然観ともいふべき問題であ

(a) Kluckhohn, F (1950) p.378 及び 同 (1953) p.346

る。祖父江は、これを F. クラックホーンの分類に従って Man-in-nature 型の典型とみている。これは、F. クラックホーンの価値指向 (value-orientation) の研究の中で示された概念で、<sup>(a)</sup> "人間の自然に対する関係" には、人間は自然に逆属するものだと考える Man subjected to nature 型、人間は自然と対抗し、それを征服するものであるという Man over nature 型、人間は自然に調和していくものだという Man-in-nature 型の三つがあり、月

本人は、この Man-in-nature 型の典型にというのである。一口に "日本人の自然観" といっても、その内容はそれぞれ単純なものではないだろう。ただ、まさに value-orientation としての、文化の底を流れる基本的方向づけとしての自然に対する関係をとらえるなら、一応この見解を妥当なものとして受け入れたいだろう。少なくとも、"自然にうまく順応し" (自然との共生) "自然を巧みに生活の中に取り入

れる”(自然に託した感情表現等)日本人の態度は、“国民性”論で繰り返し指摘されたところであった。

祖父江自身は、特にこの“自然主義”が、

日本人の「性」についての態度を、ヨリと規定してくることに注目している。キリスト教(特にプロテスタント)では、淫の快楽、欲望を邪悪なものとして抑圧する傾向が強いが、自然宗教としての神道的伝統の中では、性は、まさに「自然のままに」あるべきもの

として意識されてきたというのである。これが日本人の本来的(少なくとも庶民のレベルにおける)性意識の姿であり、これ、日本人の性意識の中に相矛盾する二つの傾向(放縱と抑圧)が共存し、歪められに形をとるようになったのは、儒教の導入と封建体制の強化という二つの要因が働いたに因るといえる。

以上は、どちらかというところパーソナリティの側面に着目した例であり、日本人の一般的特徴づけの一例であった。次に、日本文

化論への焦点となる、日本文化の全体的性格づけに関する議論にふれておきたい。「雑種文化」か「純粋文化」かという議論である。ここでは、それぞれの代表的なものとして加藤周一の『雑種文化論』(1956)と、増田義郎の『純粋文化の条件』(1967)をとりあげる。

加藤の「雑種文化論」というのは、「日本文化の雑種性」(1955)「雑種的日本文化の希望」(1955)の二つをまとめたそうよんで

(a) ページ数は講談社文庫版(1974)による。  
以下同様。

いるのだが、その主張は次のようなものである。

まず日本文化とは雑種文化の典型であるということ。その雑種というのも「根本が雑種だ」という意味で、枝葉の問題ではない。(p.32)<sup>(a)</sup>のであり、日本の文化が雑種的であることは、「今の日本の文化の枝葉に西洋の影響がある」ということではなく、今の日本の文化の根本がぬきさしならぬ形で伝統的な文化と外来の文化との双方から養われていくということ」

(p. 56) だという。

この観点から、明治以来の様々な文化運動の歴史をみると、それは、この文化の雑種性に対する知識人の反応、つまり純粋化運動の歴史としてとらえられるという。そして、それらは、“日本種の枝葉をとりとして日本を西洋化したという念願にもとづく型”と“西洋種の枝葉を除いて純粋に日本的なものを残したいという型”という二つの対照的な型に分けられる。しかし、“幹と根の雑種性”

はどのようにもならないので、どちらの試みも挫折するしかない。だから、「あゝ日本文化を純粋化しようとする念願そのものとする」(p. 34)に止まらず、日本文化は、根本から雑種であるという事実を直視していくことが重要で、「ほんとうの問題は、文化の雑種性そのものに積極的な意味をみとめ、それをそのまま生かしてゆくところにどういう可能性があるかということ」(p. 44)だとしている。

以上のように、加藤の雑種文化論は、評論



家の“現代文化への提言”というような性格が強いが、それは同時に、“外来文化の受容”という問題でもある。

増田の『紀伊文化の条件』では、これに比べると、この“外来文化の受容”という問題が正面にすえられたい。副題にも示されたい。〈日本文化は衝撃にどうにえたか〉という問いに対する増田の答は、次の通りである。

「… 外来文化の衝撃に対する日本人の態度は、案外玉かしから不変だったのではなか

か、という気がする。そして日本文化を論ずる際に大切なのは、雑多な要素ではなしに、それらを料理したり、呑み込んだり、消化したり、あるいは見ただけでサウサウとゴミ箱に棄ててしまったりする手ごねとか態度ではなかと思う。また、そのような日本的料理法によって、それらの雑多な要素が文化的複合体に組み立てられると、妙に均一で、確定的で、相も変らぬという感じの实体しか結果的に生み出さる。この事実も注目しなくてはな

らない。そのような見方をすれば、日本文化は、本質的に言、て、<sup>『</sup>雑種的<sup>』</sup>なのところから、その根本的パターンは、<sup>『</sup>ゆめゆめ<sup>』</sup>で不変で、一貫していて、純粋なのかが特徴ではなからうか  
(pp. 17-18)

しかし、この主張も、必ずしも加藤の論と対立してゐるとは思えない。上では、一応「雑種文化」「純粋文化」という対比で問題を提示したから、両者を機械的に対立させるのは生産的ではない。増田も要素の雑多性・多様性

は否定してゐない。雑多な要素の外来文化を、文字通り換骨奪胎し、消化し、変容させ、「日本化」した完成品を見る限り、そこには均一性がみられるということなのだ。そこにあるのは、いわば「雑種という純粋性」である。あるいは、言い方をかえると、受容のパターンが一貫していて、それを純粋というならいえるということである。

外来文化を、無批判に、貪欲な手取りに取込んで、それを模倣してゆく様子を、「猿マネ」

という否定的評価ではない場合もあるが、このように、それらの取り入れた外来文化を、外来文化そのものでもなく、また伝統文化そのものでもない“第三のもの”につくりかえていくことの中に積極的意味を認めるなら、それらに創造性という肯定的評価を与えることもできるだろう。

そして、この特殊性は、日本文化の特殊な条件によって可能になったと理由は指摘する。つまり、文化の受容が、征服や侵略を伴わず

に、また血の混合も伴わずに行なわれたことであり、それは日本の地理的・歴史的條件の特殊性によって可能になったというのである。

また、この外来文化の受容ということに関しては、日本文化には、貪欲なまでに外来文化を取り込む時期と、外には、トビウを閉じ、自己の文化に沈潜する時期という二つの時期の交替がみられることが、指摘されてきている。おおざっぱな過去の時代的対応を考えると、前者は、飛鳥・奈良、安土・桃山、明治

(a) 上山春平 (1967) 「日本文化の波動」『Energy』15号

大正時代であり、後者は、平安時代と江戸時代の鎖国時代である。上山春平のように、この二つの時期の交替に、600年、あるいは20年のサイクルをみる説もある。

(a)

ともかく、この自己の文化の中に沈潜し、いわば取り入れたものを、“消化”し、あるいは“発酵”させる時期をもつということは、“純粋性”を保持し得る一つの重要な条件となつていくことは確かである。

先にも指摘したように、日本文化全体の持

性として、「純粋文化」「雑種文化」というような規定づけをすること自体は、あまり意味のあることではないかもしれない。しかし、外来文化の受容というテーマは、いわば文化の吹雪だまりとしての日本の特殊な位置を考へるなら、今なお検討に値する課題であるといえよう。

以上は、日本人の中核的特色、日本文化の全体的な性格づけという形で示された日本人

論. 日本文化論の主要論点について2の, きわめて一般的な議論であった。いわば, 総論・概論にあたるものである。

次に, 各論として, 三つの具体的テーマをとりあげ, 日本人の“国民性”の一側面を論じてみたい。ここにとりあげるのは, (1) 日本人の人間関係とコミュニケーション (2) 精神主義としての根性主義 (3) 日本人の英雄観という三つのテーマである。

これらの三つは, あまりにもバラバラで,

相互に無関係の印象を与えるかもしれない。

しかし, 相互の間に関連を見い出すことは不可能ではないし, 現にそれらは存在する。ただ, それが章強付合にとられるなら, むしろ, 次のような別の理由とその根拠としてあてたい。

つまり, これらの三つのテーマは, いずれも, 筆者が, ここ一二年の間に何らかの形でかかわってきた問題であるということ, しかもその場合の問題意識の焦点は, 必ずしも

"日本人の国民性"ということではなか、た。  
そこで、ここでは、これらのテーマを、"日本  
人の国民性"という観点からとらえ直してみ  
ようというのである。

何らかの意味で今までふれてきたテーマに  
日本人の"国民性"という観点から光を当て  
たら何かみえるかというささやかな試みで、  
その限りで問題をとりあげたため、当初の問  
題意識でとらえられたものよりも問題が狭小  
化するともある。

(A) 本誌は、拙稿「"日本的"人間関係と日本人のコミュニケーション再考」  
『稿論叢』Vol.74 No.5 (1975)を基礎とし、  
加筆・修正を加えた。

## 1. 日本人の人間関係とコミュニケーションの形態

### (1) "日本的"人間関係

日本人の人間関係といっても、日本人の人間関係とは何か、日本的人間関係とは何かという正面切った議論は、もとより筆者の能力を越えている。ここでは、日本人論、日本文化論の中で、特殊日本的な人間関係として繰り返し指摘され論じられてきた、いわゆる日本的人間関係のいくつかの側面を整理しなお

し、コメントを加えることに、その目的を限定したい。

具体的には、ここでは、日本的人間関係の中核をなすものとされてきた諸側面を象徴的にあらわしていることばを手がかりとして検討の作業を進めたい。

そのうち今回は、ひとまず次の五項目を選ぶことにしたい。つまり(一)「タテ関係」「ヨコ関係」(二)エン(縁)(三)バツ(閥)(四)親分-子分関係(五)「ウチ」「ヨソ」といったものが

それである。

[2]

(一)「タテ」関係 — 「ヨコ」関係

すでにふれた、“日本人の中核的特色”の第一のものにあげられていたように、“日本的”人間関係といえば、「タテ社会」云々というものが、最も単純な連想であるほどにポピュラーになっているのが、この「タテ関係」に関する議論である。

いくらまでもなく、これは中根(1967)の著作で一般的になつたものだが、その主張は次

[3]

のように要約できる。

つまり、社会集団構成の原理には、大きく分けて二つのものがある。一つは資格によるもの。もうひとつは場によるものである。「資格による」とは、社会的個人の一定の質（氏、素性、学歴、地位、職業、男女、老若等）を基準として集団が構成される場合であり、「場による」とは、資格を問わぬ一定の枠によって集団が構成される場合をいう。そして、この後者、すなわち「場による」集団構成原

理 — “枠設定による集団構成” “枠による機能集団構成原理” — が日本社会の基本的原理であるという主張である。

そして、今度は、これを人間関係という観点から見た場合、その結びつき方の形式は、理論的に「タテ」と「ヨコ」の関係という二つに分けられるのだが、日本人の人間関係の場合、前記の「場による」集団構成原理から“理論的にも必然的に”「タテ」関係が、導かれるというのである。



こうして、日本人の人間関係の基本的特質  
 として、その「タテ」関係性が、クローズア  
 ップされ、逆に「ヨコ」関係の不在が指摘さ  
 れる。例えば、日本の企業別組合が、その典  
 型であるように、同じ資格を持ったものが一  
 定の枠を越えて連帯することは困難であり、  
 「同期の会」的な、「ヨコ」のつながりも、  
 先輩・後輩の序列を一層はっきりさせ、序列  
 意識を強化するものでしかないにとらえられ  
 る。

しかし、こうした今日の具体例をひとまず  
 おいて、もう少し“原理的に”考えた場合で  
 も例えば、例の“士農工商”に典型的にあら  
 われているように、一方でカーブ的「ヨ  
 コ」の関係を、地方で、主従関係に象徴され  
 る上下、「タテ」の関係を巧みに組み合わせ  
 てきたのが、伝統的な日本社会の支配原理で  
 あったように思われる。

だから、日本的人間関係という問題を考え  
 る場合、この「タテ」と「ヨコ」の糸が織り

なす複雑な模様を注意深くみまわめていくと  
 いう困難な課題を我々は課せられることにな  
 る。

### (三) エン(縁)

次に“日本的”人間関係にまつわる独特な  
 ことばである縁えんということばを手がかりに、  
 もう一つの側面を考えてみたい。

人と人との結びつきをあらわす、この縁と  
 いうことばは、かなり微妙なニュアンスを含  
 んだことばで、そこに含まれている包括的意

(a) 藤岡喜登(1974)における米山俊直の発言を参照

味を全部含み得る対応語を英語などの西欧語  
 の中に見い出すのは困難だ(a)という。

このエン(縁)ということばには、大きく  
 分けても、二つの異なった性質のものが含ま  
 れているように思われる。一つは、“これも  
 何かの縁でしょう”とか、“これは奇しきご  
 縁で”とか、さらには、“袖すり合うも他生  
 の縁”といった類のもの、もう一つは、血  
 縁、地縁といったような、かなり社会学的概  
 念としても通用するような意味を含むもので”

ある。

前者は、人と人との結びつき、人と人との出会いのうち何か、運命的なものを見ていくという発想で、仏縁とか、因縁とかいうことばに象徴されるように、仏教的なものの影響が明らかかなように思われる。これは、これで、日本人の心的態度、意識の問題を解くカギとして興味深い。ここではこれ以上ふれない。

一方、後者は、人間のつながりの様式、人

(4) 藤岡 (1974) *ibid.*, P. 7 及び加藤孝俊 (1966) P. 17

と人との接触の形態という原理的な分類に対応している。母—子関係を通して、また一定の<sup>スペース</sup>空間を共有する群居的動物として、人間はまず、血縁、地縁といった絆からは、逃れられない存在としてあるといえるだろう。

しかし、さらに、これに加えて、この血縁地縁を囲んで、これらとは、異なった第三の原理が存在する。——米山俊直などのグループが、“職縁”とか“社縁”とかいうことばで呼ぶものがそれである。(4)

(b) ひいては、それが、日本文化と家族主義的側面からとらえる伝統に対する批判となり得るという見解には注目すべきものがある。

ここで問題になるのは、血縁、地縁と職縁、社縁との間の性質の異同である。— 例え  
ば、同じ米山(1971)には、「ナカマ」につ  
いての議論があるが、ここでは、後者すなわ  
ち社縁で結びつく集団のアソシエーショナル  
な側面が強調されている。(p)

しかし、血縁・地縁に比べたら、社縁によ  
って結びつく集団にアソシエーショナルな側  
面が、強いことは当然である。問題はこれら  
の集団にも、機能集団としての結びつきの自

由さがないところが、日本の集団の特徴では  
ないかということである。つまり、確かに、  
いわゆる地域共同体としての古い意味での地  
縁性は失われたかもしれないが、そこで失わ  
れたものが、そのまま、これらの社縁集団の  
中に入り込んでしまっているところが、“日  
本的”集団形成の特徴ではないかと思われる。  
— それらを、他ならぬ社縁ということばで  
呼べるところが、何よりも、これらの集団の  
うちに、エモーショナルな要素が持ち込まれ

ていることの証拠ではなからうか。

### (三) バツ ( 閥 )

閥という人間集団も、“日本的”な人間のつながりのあり方としてしばしば論じられてきた。もちろん、古今東西、集団のあるところ、組織のあるところ、派閥のないところはないという考えもできる。学閥、閥閥、郷党閥、門閥等々といったようにである。だから問題は、何を契機として派閥が形成されるかという、“派閥形成の原理”で、それがあ

る社会の集団や組織のあり方の特徴を明らかにすることになるだろう。

こういう観点から、日本社会の閥を考えた場合圧倒的ウエイトを占めるものの一つが、まさに前項でふれた、血縁、地縁というエモーションナルな紐帯を契機としたものであることがわかる。——明治政府の露骨なまでの郷党閥(藩閥)、一族支配の会社組織(同族会社、同族経営)、ファミリーという名にふさわしい財閥等々と、その例には事欠かない。

もう一つは、次の項と重なるのだが、親分—子分的派閥である。これは、政界のいわゆる派閥に最も典型的に見られるもので、それらが、何れ派と、その名まえに個人名を冠していることが、いかにも象徴的である。本来は、理念や主義主張の違いによって形成されたはずの組織（<sup>パター</sup>）の中に、このような集団が分立することは、それ自体が皮肉なのだが何よりも日本の政治文化の一面を雄弁に語っている。

もっとも、先の中根(1967)によれば、「タテ」集団においては、そのリーダーと成員との結びつき方の特性から常に党中党形成と分裂の危機をはらんでおり、派閥生成は、その必然的帰結であるということにもなる。

#### (四) 親分—子分関係

すでに、一部前項でふれたが、これに関しては、いわゆる、日本社会の家族主義的性格との関連で問題にされる場合が普通である。川島(1950)の議論が、その代表的なもので

あるが、その主張のエッセンスは、家族制度の生活原理が、家族内部にとどまらず、その外部にまでも拡大されているということにある。

ことばをかえて言えば、家族外の社会においては、多くの人的結合関係が要求されるのだが、「家族的結合」しか知らない人間は、この場合の人的結合においても、「家族的」にしか、人の結合関係を意識することができない。こうして「家族的」人的結合原理が、

家族外集団においても貫徹されるため、第二の親子関係たる「親分—子分関係」は必然の産物だというのである。

さらに、諸々の擬制的親子関係が、あらゆる集団の中に庇護=奉公関係という形で浸透していることが指摘される。あの<sup>ハゲナリズム</sup>温情主義の基盤をなすものが、これである。農村の地主—子作関係は、この典型であったし、過去の農村にとどまらず、中小企業における雇主と雇人との関係、大企業においてさえ、その劣

便関係や人間関係の中にあるいは、官僚組織  
 や、先にふれた政党内の派閥の中に、また「  
 企業一家」的な発想の中に、いまだに根強く  
 残っているのである。

そして、これらの集団を律するのが、一方  
 で、「権威と恭順の原理」であり、他方で、  
 “くつろいだなれあいの原理”である。そし  
 て、この後者“親分子分的結合の家族的零団  
 気”は、外に対しては、敵対意識を醸成し、  
 次項で問題とする「ウチ」「ヨソ」の意識や、

いわゆるセクシヨナリズムの温床となるので  
 ある。

(五) 「ウチ」「ヨソ」

日本の社会集団形成の原理が、“場による”  
 ものであることには、前にふれた通りである。  
 ここでも、再び中根(1967)に従って議論を進  
 めてみよう。

「場」の原理によって成立した枠集団には、  
 絶えず、その枠をますます強化しようとする  
 力が加えられるのが常である。それは、まず



枠内の成員に一体感を持たせること、集団・  
 組織との一体感を強める努力となつてあらわ  
 れる。 — 「われわれ」意識を強調し、外部  
 の類似のグループに対する対抗意識さらには  
 敵対意識をあおつて、情緒的な結びつきの強  
 化が図られる。エモーショナルなものに訴え  
 て、ナカマ意識やミウチ意識、組織への帰属  
 意識の高揚が目指される。

こうしたメカニズムを巧みに利用している  
 のが、いわゆる日本的経営、日本的労務管理

の“思想”である。そこでは、“丸抱え”と  
 いうことばに象徴的にあらわれているように  
 従業員の全面的、全人格的な参加が求められ  
 それによつて、閉鎖的で、孤立的な、堅固な  
 集団形成が意図される。そして、こうしたフ  
 ロセスを経て形成された集団には、一定の“  
 社風”といったような一つの“文化”と呼ん  
 でもいいものが成立し、今度は、それが逆に、  
 一体感、集団化をますます強化することにな  
 る。ここには、いわばミウチのレベルで文化

とパーソナリティの相互作用の姿がみられる。

こうして、この組織・集団の枠を越えた同資格者同志の結びつきは、困難になり、同類集団の機能は、麻痺させられ、同類意識は弱められるというのである。(これが、先にみた「企業別組合」を支えるもう一つの基盤である。)

ここに、「ウチの者」「ヨソ者」という差別意識が生じる。中根は、主にこれを「場」

(1) この「コミュニケーション」は、「意思伝達のメカニズム」程度をルースに規定である。

による集団形成のもたらす必然的結果として原理的に説明したが、歴史的にみるなら、その基礎が、排他的、閉鎖的な村落共同体的、ムラの集団にあることは、改めて指摘するまでもないだろう。

## (2) 日本人のコミュニケーション

以上のように、「日本的」人間関係の諸側面をひとまずおさえておいた上で、日本人のコミュニケーションという問題を考えてみたい。(2)

い。といっても、これも、あまりにも漠然と

しており、大きすぎる問題である。ここで焦点となるのは、佐藤(1963)が、コミュニケーション社会学の課題の一つとしてあげているコミュニケーションの文化型の問題すなわち、特殊日本的なコミュニケーションの様相を一つの「型」としてとらえる検討の方向である。

しかし、こうしたテーマに限定したところで、同じ佐藤(1972)がいうように、未だその体系的総合的な研究があるわけではない。

従って、ここでも先の間関係の場合と同様に、いわゆる日本人の国民性論、精神構造論といった形で、断片的に語られているものを手がかりにしなければならない。

以上のような観点から、日本人のコミュニケーションを考えた場合、その特質として、次のようなものがあげられると思う。(一)非言語的コミュニケーションの相対的優位、(二)以心伝心型コミュニケーション(三)不自由で固定化したコミュニケーション 以下、この

(a) 前者が花田清輝、後者が木下順二のわ

三点をもう少し詳しくみていきたい。

(一)非言語的コミュニケーションの相対的優位

世良(1962)は、二つの演劇論を手がかりにして、日本人のコミュニケーションの性格が、多分に非言語的側面に力点を置いたものだという指摘をしている。つまり、一方の極に新劇(=すべてをセリフによって表現し、身体的行動が、そのセリフの説明、補足、要約であるようなドラマ)、他方の極にメロド

ラマ(=すべてを身体的行動によって表現し、セリフがその行動の説明、補足要約であるようなドラマ)を置く、劇の二分法に従うなら、日本人のコミュニケーションの性格は、“多分にメロドラマ的”だという。また、日本人のラブシーンを戯曲に書くと、言語的側面は「……」の連続で、ト書きばかりが並ぶという例も引き、日本人のコミュニケーションにおける言語的側面の空白化傾向に注目し、特にこれが自己を語る場合に顕著であること

を指摘している。

世良は、この空白化傾向を、“日本人の伝統心理の基本的性格としての「自己否定性」に結びつけるのだが、ここでは、むしろこの縮小＝空白化傾向が、言語的側面のみならず非言語的側面にもみられるという点に注目しておきたい。多田(1972)の“しぐさ”についての議論は、まさにこの点にふれたものである。

また、これは、視点を少し変えると、感情

表現、自己表現の問題としてとらえることができるわけだが、全体的に抑圧的なトーンにおおわれている感情表現は、(1)で問題としたような人間関係のなかではぐくまれてきた日本人の“習い性”だといえる。バーンランド(1973)は、これを次のように要約している。

「総合的にいって日本人は、より形式的でより規制された対人接触を好み、自己を表現する場合に、控え目で警戒的になりがちであり、開放的で卒直であるよりは、回避的で沈黙し

(a) バーンランド (1973) 邦訳 p.62

ている方を好む。これから得られる日本人の特性は、自己を強く閉じこめ、それを規制して注意深く表現し、また、より大きい私的自己が隠されているか、あるいは未知であるという姿である。(a)

### (二) 以心伝心型コミュニケーション

加藤 (1961a) は、日米のコミュニケーションの“哲学”ともいうべきものを次のように対比させている。つまり、アメリカのコミュニケーションにおける原則は、「話さなければ

はわからない」「話せばわかる」であるのに対し、日本のそれは、「話さなくてもわかる」「話してもわからない」であるという。カクテルパーティー、茶の湯が、それぞれの象徴であり、これはまた、人格の部分的理解と、完全な全人格的理解という両者の間の「わかる」意味の違い、「わかりあう」型の違いにも対応しているという。つまり、日本人は、「わかる」ことについて完全主義者でありすぎるため、そのコミュニケーションは、「言

わが語らざるうちにツーカーと通じる完全  
コミュニケーション"か、しからずんば、"  
話し込んでムクバという完全ダイスキミュー  
ケーション"かという両極に分かれるという  
のである。

そして、こうした原則から導かれる日本人  
のコミュニケーションの特徴、即ち「コトバ  
を使うことじしんを拒否した沈黙の美学。言  
わが語らざるの世界に意味をあたえそこから意  
味を吸収する方法。コトバを媒介としない直

(a) 加藤 (1961a) p.40

観的認識力<sup>(a)</sup>とは、「察する」とか「腹芸」  
とか「以心伝心」とかいうことばであらわさ  
れる「日本的」コミュニケーションの特質に  
他ならない。

また、加藤周一(1972)は、やや異なった  
視点から次のことを指摘している。つまり、  
日本社会の著しい特徴の一つとして、小集団  
の成員相互間のコミュニケーション——「内  
コミ」(intra-group communication)——は  
円滑であるが、小集団相互の(小集団の成員

個人または複数と、集団外の個人または複数とのコミュニケーション——「外コミ」(inter-group communication)——が困難であることがあげられるとしている。これは丸山(1961)の例の“タコツボ型”云々の議論と重なるもので、指摘としては、目新らしくはないが、日本人のコミュニケーションの形態を考える際の一つのポイントにはなるう。そして、これは、いくまでもなく、前に述べた「ウチ」「ヨソ」の議論に結びつく。ウ

チワ、ミウチ、ナカマという閉鎖的、排他的な集団内部での意志疎通は、スムーズであるのに対し、集団外部とのコミュニケーションは著しく阻害されている。コミュニケーションを通じて、新たな人間関係をつくりあげていくことが、我々は、おそらく不得手のように思われる。「話さなければわからない」状況にあって沈黙がちであり、「話さなくてもわかる」集団の中で、かえって饒舌なのである。



(三) 不自由で固定化したコミュニケーション

人間関係とコミュニケーション関係との間  
に、密接な相互関係があるのは当然のことだが、日本人のコミュニケーションを考える場合、前者が後者を規定する度合いが相対的に高いように思われる。さらに言うなら、固定化した人間関係にコミュニケーション関係が従属しているのではないかということである。

例えば、佐藤(1958)の次の発言などは、

(四) 佐藤忠男(1958) P.137

この点にふれていると思われる。「細心の注意を凝らして、対人関係を円満に処理してゆきたいと念願している日本人にとって自分はどろいり立場の人間であるかというこををはつきり表明することなしには、なかなかコミュニケーションが成立しない」(四)

また、この状況は、繰り返し指摘されている「敬語」の問題を念頭におけばより明確になる。日本人の場合、自分と相手がどろいりな関係かがわからないと一言もしゃべれない。

つまりコミュニケーションを開始できない。

換言すれば、我々は自分と相手との関係を瞬

時に判断して、それにふさわしいことはでし

やべる。つまりそれにふさわしいコミュニケ

ーション関係を成立させるというまことに困

難な要請にこたえなければならぬことになる。

る。

これは、また先にふれた「タテ」関係の必

然的産物でもあり、それに伴う強烈な序列意

識が、コミュニケーションや、日常的な行動

までも規定してくる。(例えば、上座・下座

などの別等)複雑で、繁雑な人間関係は、こ

うして、自由なパーソナルな人間的コミュニ

ケーションの発展を阻害し、それは、ある特

殊な場合・状況 — それもある種の浅薄さを

装わなければ成立し得なくなる。

また、このような人間関係が、固定化し、

儀礼化すればするほど、それに従属したコミ

ュニケーションも意味のないことばの交換と

いう“形骸化したコミュニケーション”に墮

するだろう。ここに、ことばに対する不信感  
 は不可避である。それ故、今日的意味でのこ  
 とばに対する不信感とは多少異質の、ことば  
 に対する不信は、日本人の間には、かなり根  
 強く伝統的に存在してきたように思われる。

例えば、これは、「タテマエ」と「ホンネ」  
 の使い分けという問題と無縁ではなく、“察  
 する”ということも裏を返せば、こうした「  
 タテマエ」のことばの裏に隠された「ホンネ」  
 をさぐる — “かんぐる” “ハウのうろを読

む” — という否定的な側面も含み得るも  
 のである。また、“思いやり”や“同感”や  
 “想像力”も、ややもすると小心に他人の顔  
 色をうかがういじましい生活技術と化す危険  
 を含んでいる。日本的コミュニケーションの  
 特質をさぐることとともに、その肯定的・否  
 定的側面を振り分ける作業も決して容易では  
 ない。

- (a) 「通俗道徳」については、安丸良夫 (1974) に依拠した。
- (b) 山岸俊男・市川考一 (1974) 「根性主義の社会心理学的研究 (1)(2)」  
日本社会心理学会 第15回入会論文集 pp. 33-40
- (c) 「根性主義尺度」と「通俗道徳尺度」との間には、0.54という、かなり高い相関を得た。

## 2. 精神主義としての根性主義

我々は、以前別のところ<sup>(a)</sup>で根性主義を現代の「通俗道徳」としてとらえ検討したことがある。そこで<sup>(b)</sup>は、同時に調査を行ない、SD法、尺度法の因子分析等により、数量化によっても両者の間に共通性をみていこうとする。我々の基本的仮説は支持された。<sup>(c)</sup>

そこで、「通俗道徳」と「根性主義」とのかかりをみていく視点は、それに譲り、ここでは、根性主義をその精神主義という特徴

からとらえ直してみようと思う。つまり、日本人の心理的伝統の一つとしての精神主義の流れにのり限りで問題としにい。

まず、「根性」ということばについて、簡単にふれておかねばならない。代表的な辞書辞典によりそれをみておくと次の通りである。

【根性】人の生まれつきの気象、性質。こころね、しようね。(仏) 気力の本と根といひ、善悪の習慣を性といふ。(大漢和辞典—大修館書店 1957) 【根性】 ココロネ、コ

コロダテ。<sup>コウネ</sup>性根。(新訂大言海 1956 富山房)

【根性】 その人の基本的な性質。こころね、しようね。(広辞苑 第二版 1969)

このように、我々が、今日ふつう「根性」ということばで第一に思いうかべるものは、必ずしもうまく説明されていらない。ようやく新訂大言海の「根」の項目をみて、「事ヲ行フニ久シク堪ヘ忍ブ精神ノ力」という説明を見出す。この「根」の意味こそ、我々がふつう「根性」ということばで第一に意味する

(a) "根性"ということばの持つ独特なニュアンスを掴み得る英語の  
対訳語を見出すことが困難だといった方がいいのかもしれない。  
guts (ガッツ)ということばもあるが、これもすでに和製英語化している。

ものなのである。

"根性"ということばにこうした二つの異  
なる要素が含まれるということば。逆に、

根性ということばの英訳を求めるときに明確

になる。それによると"根性"は、①性質、  
one's nature, 気質 temper, (a) disposition

②精神 spirit, 意志の力 will power,

闘志 fighting spirit: grit, 頑張り tenacity

; doggedness (新和英中辞典 - 研究社 1968)

(a)

このことは、どう解釈すべきであろうか。

"根性"ということばの本来の意味は、①の  
なかる人の本性なり気質という意味で、②の  
ような意味は、後に加わったものであろうか。

もしそうだとしたら、それは歴史的には、い  
つごろのことであろうか。—しかし、こう

した"根性"の語源や意味の変遷をたどり、

それを明らかにするための材料は、今の段階  
では十分とはいえない。

ただ、次にあげる辞典の説明は、このこと  
に対して一つのヒントを与えてくれるかもしれ

れない。最も新しい整備された大辞典である  
と思われる日本国語大辞典(小学館1974)  
によると、こんじょう〔根性〕は次のように  
説明されている。

①(「根」は力があって強いはたらきをも  
つもの。「性」は性質。)仏語。仏の教え  
を受け取る者としての性質や資質。

②生まれつきの性質。ひねくれこいたり、  
ずうずうしか、たりして好ましくない場合  
にいう。こころね、しょうね。

③苦しみや激しい訓練に耐え、へこたれない  
で事を成し遂げようとする強い気力。

このように、こころはじめて、先に引用し  
た「根」の意味、我々が今日「根性」という  
ことばであらわす意味が、〔根性〕の説明の  
なかにならぬ一つの独立した項目として明確な形で  
出てくるのである。このことは、気力ないし  
意志の力といういわば狭義の「根性」が、相  
対的に新しいものであることの一つの根拠と  
ならぬだろうか。むしろ、これによって、

(a) 「根性主義」のむろ一人の共同研究者である島田幸男の作製したものに筆者が多少補足をした。島田幸男(1975)『根性主義研究』(学士論文)参照。

その起源を「いっ」と断定することはできないが。

それに比べて、ブームとしての「根性」、つまり、流行や風俗としての「根性主義」を社会心理史的にたどることは比較的容易である。大まかな流れとして明確にあとづけることも可能である。(表-1)

表からも明らかのように、現代の根性主義の社会心理的噴出の顕著な具体例は、60年代初頭に起り、64年の東京オリンピックと

契機にそのピークに達した根性ブーム、70年前後のスポ.コン(スポーツ根性もの)路線に象徴される第二次根性ブームが代表的なものである。

つまり、ブームとしての「根性」は、まず「大阪商人もの」といわれる一連の文学作品や演劇によつて、一般化のきざしをみせ、それがスポーツの分野にもち込まれることによつて(しかも、オリンピックというイベントをその最大の契機として)一気にポピュラー



年	出版物・漫画	TV番組 (平根も) 流行歌	根性論、根性研究
1957	山崎豊子 『船乗り』 (東京社)	利用英雄 『人生劇場』	
1959	『花のれん』 (新潮社)	村田英雄 『王将』	
1960	『花のれん』 (中興社)	島山みどり 『お世街道』	
1960	『おしん』 (朝日)	村田英雄 『東海道一代』	
1962	『おしん』 (朝日)		
1963	莫田一夫 『おしんにれ』 (光文社)		
1964	『おしん』 (朝日)		
1964	大松博文 『おしん』 (講談社)		
1964	『おしん』 (朝日)		
1964	田島道文 『おしん』 (講談社)		
1964	森孝 『おしん』 (講談社)		
1964	八田一朗 『おしん』 (講談社)		
1964	八田一朗 『おしん』 (講談社)		
1965	『おしん』 (朝日)		
1965	八田一朗 『おしん』 (講談社)		
1965	小里子喬 『おしん』 (講談社)		
1965	河西昌枝 『おしん』 (講談社)		
1965	本田三平 『おしん』 (講談社)		

表 1

1966	『巨人の星』 (NTV)	水前寺清子 『巨人の星』 (朝日)	藤巻尚憲 『根性論』 (朝日)
1967	『巨人の星』 (NTV)	水前寺清子 『巨人の星』 (朝日)	『根性論』 (朝日)
1968	『巨人の星』 (NTV)	『巨人の星』 (NTV)	『根性論』 (朝日)
1969	『巨人の星』 (NTV)	『巨人の星』 (NTV)	『根性論』 (朝日)
1970	『巨人の星』 (NTV)	『巨人の星』 (NTV)	『根性論』 (朝日)

(10x40)

表 1 (つづき)

(a) "根性"は、"ウルトラC"などとは異なり、1964年の流行語のベストリーに入っている。岩崎・加藤(1971)、石川(1971)参照

(b) この部分に関しては、見田宗介(1971)から多くの示唆を得ている

なものになったということ。さらに、それが

後に、主として子どもを対象としたマスコミ

文化の中に、また、ビジネスや経営の世界に

復活したということがいえよう。

そして、我々は、この二つの時期のブーム

が、それぞれ、'60年代高度成長政策の進展に

伴う旧中間層(主として中小企業)の分解過

程、及びホワイト・カラーの内部分解過程(1)

モーレッツ社員・ソーレッツ社員( )という社会

的対立物をも、生きているのではないかと考えて

いる。また、この両者をはじめてみた場合、後

者の方が、より産偽意識的・イデオロギー的

性格が強いのではないかと考えるのである。

(これらについては、未だ仮説の域を出ず、

十分な裏づけ作業は、進行中である。なお、

さらに大胆な仮説をつけ加えるなら、幕末以

来の日本社会を考えた場合、そこには民衆・

大衆の上昇欲求と没落不安を巧みにすくい上

げるメカニズムとして、またそれと対応した

民(人)衆の側の生活規範として、通俗道徳-

立身出世主義 根性主義 というような一貫した流れをたどることができるとはなからうか。)

とここで、このいわば狭義の“根性”を中核とする根性主義の特徴は何であろうか。まず根性主義というものは、ある種の困難な状況危機的局面に直面した人間に最も訴えやすく、また発動されやすい対応様式であり、その第一の特徴は、精神主義である。それは、そもそも肉体的・物質的とにかかわらず、あらゆる

(a) 又松傳文 (1963) 『おれにふたこい!』 講談社 pp.108-9

るハンディキャップは、精神力によって補いかつ克服可能であるという信念と行動とによってあらわれる。例えば、次のような発言はその典型である。「(バレーボールの日本選手に向って)君たちはカチワなのだ。ソ連と対決することは、カチワが五体満足な者となかろうのと同じだ。勝つためにはどんな無理をしても、このハンディキャップを埋めなければならぬのだ。」

次に、これが、<sup>(a)</sup> 実際の態度・行動となつて

(b) いずれも 大松 (1963) *ibid.*, p. 33.

具体化される際にとられる方策なり様式が、  
 その第二の特徴となる。“カシバリ可”<sup>カ</sup>“カ”<sup>カ</sup>（  
 頑張り主義）ともいうべき精神に支えられた  
 緊張を伴う持続的努力である。〈人間の努力  
 は、不可能を可能にする〉（p. 170）〈天才  
 とは努力する能力をもつてゐる人だ〉（p. 172）  
 〈人間の成果のすべては、苦勞と努力の集積〉  
 〈p. 62〉<sup>(b)</sup>であるという努力主義が“それ”である。  
 また、ある一つの目的（標）実現に向けて  
 の持続的努力のためには、すべてのエネルギー

一が、それに向けて集中されなければならな  
 い。つまり、他のすべての欲望は、抑制し、  
 断ち切り、こしまわなければならない。—こ  
 こに禁欲がフローズ・アップされる。  
 さらに、根性主義は内面からの脅威（不安  
 劣等感等）によつて、行動の一貫性が崩れる  
 ことに対する歯止めを要求する。精神主義に  
 裏打ちされた絶えざる強化が、必要なのであ  
 り、それは、“己に克て！”というように教  
 えに象徴される。

ここに至り、根性主義は、客観的条件から  
目をそらし、むしろ内面のみに向う自己修  
養の様相を帯び、観念的性格と一層強めるこ  
とになる。換言すると、持続的努力による活  
動そのものが自己目的化するのである。こ  
うなると、まさに精神修養、「一途」修養的な  
性格を濃くしてくる。

こうして、少なくとも当初において、明  
確な目的実現に向けようとする自発的努力であ  
るものが、本来の目的を失うとともに、その自

発的性格さえ弱めていくことになる。つまり、  
ある範囲においては、合理的反応であるにもか  
わらず、防衛反応に転化していくのである。そ  
れは、いわば「観念的幻想に現実を見失った虚  
偽意識としてのイデオロギー」と化した「根性  
主義」の姿だといつていいだろう。

以上、要約的にみれば、このように、「根性主  
義」と貫く最大の特徴は、精神主義に他なら  
ない。我々は、数量化においても因子分析に  
よって、根性主義に、「精神主義」と「努力」

という二つの因子を抽出することができている。つまり、数量化によっても、これは実証されているのである。日本人の心理的伝統としての精神主義の流れに、根性主義を位置づけるゆえんである。

さて、この日本人の心理的伝統としての精神主義を肉体主義との対比で論じたのが、南博『日本人の心理』(1953)であるが、ここでは、精神主義は、まず次のようなものとしてとらえられている。

つまり、精神主義は、「何らかの意味で、精神が肉体あるいは物質に優越するという考え方と、それにもとづく行動」(p.156)であり、それは、そのあらわれ方によってもさらに三つに分かれるという。1)人間の知恵と力の限界をこえろと思われろ状態に、「精神力」がはたらいて、思いがけぬ超人的なことをやり遂げられるという信念 2)精神のはたらきで物質的な条件が変えられるという考え 3)物質のなかにも精神がこもっているとい

(a) 南 博 (1953) p. 156

(b) 本来の「ヤマトにまじい」が、これと似てに異質なもののみ、だから示し  
たものに 青藤 正二 (1972) がある。

う物神性の観念、あるいは、物バ一如論<sup>(a)</sup>

根性主義が直接かかわり、こくるのは、ひと

りす「この1) 2) であるわけだが、非合理主義

と結びついた日本的<sup>(a)</sup>精神主義の要しき典型と

しての、いわゆる「軍人精神」「日本精神」

「ヤマトタマシイ」は、これらのすべての形

態をと、てあらわれたのであった。

その具体例は、南 (1953) にも詳しいが、

先のベネディクトの『菊と刀』でも、戦争と

「アメリカ人の物に対する信仰と日本人の精

(a) Benedict, R. (1946) chap. 2

神に対する信仰との戦い”としてとらえ、”

日本人は必ず精神力で物質力に勝つ”とした

日本人の精神主義的態度に驚異の目で見られて

いる。<sup>(a)</sup>

いわゆる「根性」は、ヤマトタマシイの現

代版だというところからいえるように、根性主

義にもまた、非合理主義と結びついた日本的

精神主義のカゲは濃い。「根性」によるしこ

りが、合理的・科学的なトレーニングとは、

まさに対極のものがあることはその象徴であ

る。

このように、非合理主義と結びついた日本の精神主義は、日本人の心理的伝統の一つの流れであり、ということば、"国民性"の一つの顕著な特徴としてとらえていいものではないかと思われる。

肉体主義が、しばしばそれへの反作用として、前面に出てくる事実、及び肉体主義、物質主義の相対的優位化の方向という現代的特徴も検討せねばならぬ重要な課題であるが、

- (a) 拙稿 (1975) 「"英雄"の社会心理学的研究」日本社会心理学会 第16回大会論文集 pp.161-164 及び  
同 (1975) 「social type としるの英雄像」『一橋研究』No.30

精神主義の流れは、意外に底深く、根強いものとい、ていいのではなからうか。少なくとも、精神主義の変遷の過程をたさえることは、社会心理史をたどるといふ今後の課題にとつて一つの軸となることは確かである。

### 3. 日本人の英雄観・英雄像

筆者は、以前「英雄」像についての社会心理学的検討を試みたことがある。その主要なポイント<sup>(a)</sup>は、"国民性"研究にあるので



はたかく、O. クラップの "social type として  
の英雄像" というとらえ方に主として依拠し  
た価値意識の研究を最終の目的としたもので  
あった。

こゝでは、そのうちの日本人の "国民性"  
という観点からみて、かかめ、とくる部分に  
けと取り出して問題にしてみようと思う。

まず、英雄像なり英雄観というものを検討  
することから、何故国民性研究の一部にたり得  
るかということを明らかにしておかなければ

なるまい。そして、そのためには、"英雄"  
とは、何なのか——つまり、英雄研究の前提  
になる英雄のとらえ方の基本的コンセンサス  
ともいうべきものをおさえておかなければな  
らぬまい。

いうまでもなく、英雄とは、辞書的定義に  
よれば、"すばかに才知・実力を持ち、非凡  
なる事業をなしとげる人" ということになるが、  
もう一つ欠くべき重要な条件があ  
る。それは、そういう人間として、他の多く

の人々に認められたいことである。彼の勇  
 気、高潔さ、功績が、人々によつて賞賛され  
 なければならぬのである。— 極言するに  
 ら、ある人間の持つてゐるすぐれた資質が、  
 民衆・大衆によつて、神格化され、伝説化さ  
 れ、虚構化のプロセスを経たときに、一人の  
 “英雄”が、誕生するのである。英雄、あるいは  
 英雄像は、民衆・大衆の願望の反映であり、  
 彼らの夢や希望を人格的に形象化したもので  
 あるという“通説”は、この条件を基礎とし

たものである。

さらに、もう一つ、より“社会学的”な言  
 いをかしにするコンセンサスがある。それは  
 単純化して言うなら、英雄像というものは、あ  
 る特定の文化あるいは集団の中で望ましいと  
 思われたいもの、すなわち理想的価値や規  
 範の体現者であるというものである。

この二つのコンセンサスに我々は注目した  
 い。何故なら、これらは、同時に、英雄研究  
 の基礎と意義について語つてゐるからである。

つまり、我々は、この前提を受け入れるなら、  
 遂に、英雄像・英雄観を検討することによっ  
 て次のものを明らかにすることができるとい  
 える。

一つは、民衆・大衆の夢やら願望であり、

もう一つは、その社会が成員の間で、最も高  
 い価値を与えているもの＝理想的価値——さ  
 らにもっと一般的にいうなら価値観・価値意  
 識・価値システムの一側面——である。

ここで、むしろ、英雄像や英雄観の研究が、

国民性研究と深くかかわり、こゝろのことについ  
 て、くどくど述べる必要はあまるまい。上記の  
 こゝろのものの比較文化的研究は、国民性研究  
 の主要な構成要素の一部にほり得るからだ。

ところで、冒頭でふれたD. クラップの英  
 雄研究は、後者、第二のコンセンサスの立場  
 に立つものである。彼は、その著書 Heroes  
Williams and Fools (1962) において、英  
 雄と社会的タイプ (social type) との関連で—  
 [4]  
 つの役割モデル (role-model) としてとら

(2) Klapp, O. (1962) p. 17

えている。

クラップ<sup>o</sup>によると、英雄・悪漢・阿呆は、  
どの社会においても集団の成員やある地位を  
占める者に対し適用される規範との関係で

(a) それより優れている (better than ...)

(b) それにとり危険である (dangerous  
to ...)

(c) それに達しない (falling short of ...)

という3つの方向をあらわすものだとされる。  
(a)

また、これらの基本的モデル(英雄・悪漢

阿呆)は、どの社会においても、社会システム  
を維持するために、あるいは成員を統制す  
るために用いられるという意味で、社会統制  
(social control)の三つの基本的側面とあら  
わしているともいえる。

[5]

こうして、クラップ<sup>o</sup>にあっては、英雄は、  
何よりもまず、規範(norm)の、より良き体  
現者としてあらわされる。英雄は、あるエー  
スのあらわす主要なテーマの担い手として、  
とらえられるのである。

(a) Klapp, O. *ibid.*, p. 27

この基本的考えに従って、クラップは、英雄を五つのカテゴリーに分類し、それぞれがみられている価値と業績のテーマとして、次のようなものをあげている。

(a) [6]

カテゴリー

テーマ

- 1) 勝利者 (Winners) ; 人々の得たかと思つてい  
ものを手に入れ、すべての  
人と打ち負かし、チャンピオンとなる
- 2) 人並みすぐれた名手 (Splendid Performers) ; 観衆の前で輝き、"ヒット" とはば

- 3) 社会的受容の英雄 (Heroes of Social Acceptability) ; 誰からも好かれ、魅力的で善良。あるいは個人的に集団に受け入れられ、帰属の喜びを集約的に示す
  - 4) 独立の人 (Independent Spirits) ; 孤高の、一人我が道を行く
  - 5) 集団への奉仕者 (Group Servants) ; 人を助け、協力し、自己犠牲的の一集団のために奉仕し、結束を高める
- いうまでもなく、これは、アメリカ社会を

(a) 日本で英雄を問題とした場合、クラップの分類がはたしてうまくあはまるかどうかという素朴な疑問から出発したい。

基礎として抽出された。英雄のカテゴリー分けの一例にすぎない。しかし、ここからアメリカ人の英雄像の一端をうかがうことは可能である。そこで、ここからは、いわば「英雄研究」の最終的課題（英雄像の比較文化的研究）と先取りするという形で、日本人の英雄像、「日本的」英雄という問題にふれておきたいと思う。

(a)  
真の意味での「日本的」英雄像というものは、体系的な比較研究を通じて、はじめに明

らかにされるものであることはいうまでもない。だから、ここでは、「日本的」英雄像について従来何がいわれてきたているか、「日本的」英雄像を考える際のポイントは何かという議論になる。

日本における英雄、日本人の英雄像というテーマについては、歴史家や文学者によって論じられたものが多いように思われる。先に述べた第一のコンセンサスとささえたものが、この流れである。

(a) 尾崎秀樹 (1968) R6

その代表的な一例として、例えば、主に大衆文学の研究を通じて、英雄像をめぐっての尾崎秀樹の議論がある。まず、これを手がかりとして、日本人の英雄像、"日本的"英雄の一面面を考察してみたい。

英雄の条件として尾崎は次の五つをあげている。

(a)

- 1) 正義派であること
- 2) その正義をのべ行なうためには乱世でなければならぬ (乱世が英雄を生む)

(a) このうち 2) は、英雄の属性というよりも外的条件について述べたものである。他の 4つとは異質なものである。

3) 人に扱えんじている体力と知力を持っていること (英雄としてのスタミナ)

4) その末路が悲劇的であること

5) 生涯のうちにくっつかのナツが含まれていること

(a)

一見して明らかのように、これは、先にあげた、フラックの英雄の五つのカテゴリー、及びそれらのあらわすテーマとは、微妙なズレを示している。そして尾崎が、具体的に扱っているのは、いずれも日本の英雄ばかりだ

あり、ここにあげられていゝ条件は、実質的には、日本人の英雄像、"日本的"英雄の条件と考えられるので、一層この点は、示唆的である。

特に、ここでは、第四の条件に注目したい。この第四の条件：その末路が、「悲劇的」であることという条件から容易に想起されるのは、いわゆる"判官びいき"と呼ばれていゝ日本人の心的態度である。義経伝説をつくり、四十七士の物語の人気を支え、西郷隆盛を英

(4) 神島二郎 (1961) R83

雄としたのは、他ならぬ、この"判官びいき"であつたといわれている。

もう一つの例をあげておくと、神島二郎は、日本人の英雄観にふれ、特に庶民の英雄観には、次の五つの系列があることを指摘している。

- 1) 異常人崇拜(カリスマ崇拜)
- 2) 太閤崇拜
- 3) 剣の礼讃(『大菩薩峠』などの大衆文学のヒーロー)



4) 判官びいき

5) 孤独の正義派 (股放物等)

ここでも, "判官びいき" は, 一つの重要な系列としてあげられてくる。

これらは, "判官びいき" の重要性を示唆する例のほんの一部にすぎないが, 特に英雄観と結びついた日本人の "判官びいき" は, 多くの論者の共通して指摘する特性であり, すでに一つのコンセンサスかのようになっている。

筆者自身もまた, この "判官びいき" を核として, 日本人の英雄像, "日本的" 英雄の重要な一側面が明らかにされるのではないかと考えている。特に虚構化され, 神格化され, 伝説化された英雄の場合には, この方向からのアプローチが不可欠のものとなろう。

いや, もっと正確に言うなら, 我々の明らかにしなければならない課題は, こういうことだ。つまり, 一つは, この "判官びいき" なるものは一体どういうものなのかを明らかに

にすることであり、もう一つは、“判官びいき”というものが、本当に日本人に特有な心的態度といえるかどうかということ、すなわちコンセンサスか、それとも単なるステレオタイプかという根本的検討を加えることである。

さて、筆者はまた、先に述べたような問題意識と基本的枠組にもとづいた調査を行なっているが、その結果の一部を、これもまた“国民性”論にかかわってくる部分のみを取り上

げ、その文脈で再検討してみたい。

まず、調査の目的及び課題、手続き等について、必要の限りで説明しておかねばならない。それらは、以下の通りである。

### <目的及び課題>

- (1) O. クラップは、アメリカ人の英雄像にもとづいて、英雄のカテゴリー分けを行なっているが、日本人の場合で、それを行なうとどのような結果が得られるか。またひいては、そこから、“日本的”英

(a) 同時に質問Ⅱで行なう。SD法による調査がこの課題に対応しているか  
こゝでは省略する。

英雄といふものが明らかにいふか。

(2) 英雄の属性とは何か。英雄のイメージは  
どんなものか。

(3) 英雄と尊敬する人との対応関係をみる。

英雄が、理想的価値あるいは規範の体現  
者であるという基本的前提の妥当性を検  
討する。

(4) 英雄とスターとの対応関係をみる、英雄  
から有名人へ、英雄からスターへという  
移行を検討し、そこから“現代の英雄像”

というものが、つかぬかどうかをみる。

<方法>

[1] 調査対象：都内A大学生86名、神奈川  
B大学生91名、都内C女子高校生91名、  
計268名 内男100名 女168名

実施期間 1975. 5~6

[2] 手続き：質問紙法

あらかじめ自由記述の70リテストで得  
られた人物の中から、50名を選んで、  
その各々に対して次のような質問をし

た。

《 質問 I 》

あなたは、次にあげる人物(架空の人物を含む)は、英雄、悪漢、阿呆、ス

ター、尊敬する人のどれにあたると思

いますか?あてはまると思うところに

○印をつけて下さい。また以上のどれ

にもあてはまらないと思うときには、

「どれも知らない」の欄に○印をつけて

下さい。その人物を知らない場合は、

「知らない」という欄に○印をつけて

下さい。なおえっ以上にあてはまると

思うときには、2個所以上の欄に○印

をつけて下さい。

例	英雄	悪漢	阿呆	スター	尊敬する人	どれも知らない	知らない
山田 一郎				○			
加藤 二郎	○			○	○		
田中 三郎						○	

このようにして得られた単純集計の結果を参考のためあげておくと表-3 (注-18) 参照の通りである。

<分析・結果・考察>

I. ここでは、直接の論点にはならぬものの、  
 で詳しい結果については述べないが、前  
 記の課題(3)(4)を明らかにするために  
 (すなわち、英雄、悪漢、阿呆、スター、  
 尊敬する人のそれぞれの間、あるいはか  
 ら対応関係をみるために)各々の組合せ  
 の順位相関を求めた。(結果は表-  
 4, 次ページ)  
 表から明らかのように、英雄-尊敬す

	英雄-悪漢	英雄-阿呆	英雄-スター	英雄-尊敬する人	悪漢-阿呆
r <sub>s</sub>	-0.239	-0.584	-0.021	0.508	0.480
r <sub>b</sub>	-1.673	-4.088**	-0.147	3.556**	3.360**
	悪漢-スター	悪漢-尊敬する人	阿呆-スター	阿呆-尊敬する人	スター-尊敬する人
r <sub>s</sub>	-0.098	-0.641	0.272	-0.633	-0.115
r <sub>b</sub>	-0.686	-4.487**	1.904	-4.431**	-0.805

表-4

P < .01\*\*

る人、悪漢-阿呆が有意に高い相関を示  
 し、英雄-阿呆、悪漢-尊敬する人、阿  
 呆-尊敬する人が、有意に高い逆相関を  
 示していることがわかる。このことから  
 英雄が、規範あるいは理想的価値の体現



英雄が、ほぼ4つのグループにカテゴリ  
 分けされる。以下は、その一つの解釈  
 の試みである。

### [1] <怪盗>型

第一のグループは、一応<怪盗>型と名  
 づけてみた。アルセーヌ・ルパン、三億円  
 事件犯人、ルパン三世のグループは、明瞭  
 な共通点を持っており解釈は容易である。  
 いずれも<盗人>の類なのだが、そこには、  
 犯罪や悪のもつ現実的な生々しさ、あくと

さがなく、それらは抽象化され昇華されこ  
 しまっている。そして一種の“カッコよさ”  
 だけが残った、いわば“英雄化した悪漢”  
 (悪漢の英雄化)のグループである。

### [2] <殉教>型

ジャンヌ・ダルク、シュバイツァー、大  
 石内蔵助、長島茂雄 — このグループは、  
 一見統一を欠き、解釈は困難であるが、い  
 ずれも自覚した使命に殉じた人間であるとい  
 うことはいえるかもしれない。<殉教者>

(A) 注[6]参照.

というのは、クラブの分類でも、Group

Servants の中の重要なサブカテゴリーの一

つに属している。彼らは、何よりも loyalty

を象徴しているものだというのである。ち

なみに、クラブによつてあげられている

具体例は、ジャンヌ・ダルク、イエス、ガ

ンジー、サッコ & ヴァンゼッチ等である。

### [3] <非命>型 (悲劇的英雄)

最も多くの人物が、このグループに集中

しており、英雄のいかは「ステレオ・タイプ

とあらゆるグループだともいえよう。ベー

ト・レーエン、ナイチンゲールを除けば、い

ずれも天下・国家一帯の意味での政治を

舞台として活躍した英雄だといえてよい。

その時代により、征服者、征服の英雄と、

すぐれた政治家という二群に分かれるとい

ってよいかもしれない。いずれも非命の

死・非業の死を遂げているという点で共通

し、その意味では、「悲劇的英雄」でもある。

る。



#### [4] <天下人>型 (成功者型)

毛沢東の異質さは問題にされるかもしれ  
ないが、そのプロセスには違いはあれ、最  
終的には権力を手中におさめ、相対的に安  
定した支配の時代を築いた<成功者>のグ  
ループだとしておこう。また同時に、彼ら  
は、指導者としての英雄であるといつても  
よい。“乱世の英雄”が、“統治の英雄”  
にまでなり得た数少ない例だといつても  
よい。

以上みてきたように、上に示した結果と考  
察からは、英雄が理想的価値や規範の体現者  
であるという基本的前提は、明確に支持され  
た。それでは、日本人の英雄観、英雄像とい  
う観点からみた場合はどうであろうか。  
もちろん、これだけの少数のサンプルから、  
“日本人”云々や“日本的”云々という一般  
化ができないことは当然である。ここでは、  
そうした保留つきで、何らかのヒントと手が  
かりをつかむことで、ひとまず満足しなけれ

ばならない。

上記Ⅱ. で示したように、数量化Ⅲ類の分析によつて、“日本的”英雄、あるいは“判官びいき型”英雄といったグループが、必ずしも明瞭な形で析出されたとはいえない。しかし、もし日本人の英雄像の中核をなすものが、[2] や [3] のグループだとするならば、これらの“殉教性”なり“悲劇性”なりは、示唆的である。— これらは、“日本的”英雄、“判官びいき型”英雄の属性とみなす

(a) 高校生・大学生約130名を対象に実施した(1975.5)

れたものに他ならないからである。

さらに、単純集計の結果において、西郷隆盛、大石内蔵助、源義経という“判官びいき”の典型とされている人物が、上位を占めるといふこと、またそれ以前にフリテストで自由記述させた場合、これらの人物がまさしく取りあげられるというそのこと自体のうちにもそれなりの意義を見い出して面白いのではなかろうか。つまり、これらのこと自体が、すでに、判官びいき的心情の根強さを語っている

るの2はなからうかということである。

今までは、議論の中心となる“判官びいき”を明確な規定なしに、“悲運な英雄に対する愛惜や同情”あるいは一般的に弱者や敗者に対する同情やいいきという、いわゆる判官びいきとして使用してきた。ひとまず、ヒントや手がかりを得るというこの2の目的のためには、それで十分なのだが、判官びいきそのものさらに詳細に検討することも、もう一つ別の課題となり得ることは前にも述べた通

(a) 佐藤忠男(1958) pp. 59-60

りである。

ここ2は、そうしたもののほんの一部に簡単にふれておこう、判官びいきの心理のとらえ方であるが、例えば、佐藤(1958)は、その中に屈折した庶民の心理をみている。つまり、判官びいきには、確かに「権力の座につく油ぎった実力者を憎み、すばらしい力量を持ちながら、時の権力に反抗して死を遂げる純情一途な人物を愛する」という好み<sup>(a)</sup>という側面があるけれども、それらが、本当に、“反

“抗精神”や“野党精神”や“反権威主義”か  
 という答えは「否」だというのがである。そ  
 れらの本質は、むしろ権威主義的な道徳的マ  
 ソヒズムであり、自虐的な嗜虐の精神だと  
 いうのだ。

確かに、主人公の非運や不幸に対し、いわ  
 ば身につまされ<sup>て</sup>同情心を寄せるとは、彼が  
 感じたであろう口惜しさや、自分の口惜しさ  
 と同一化している姿であり、それは互いの傷  
 とをぬくという嗜虐の図である。また、判

(A) 和歌、森 (1966) p. 28

官びいさば、貴種流離譚の伝統のう之に位置  
 づけられるというが、こゝからも反権威主義  
 が出てこない。<sup>(A)</sup>

さらに、もう一つ別の問題として(問題は  
 まだ少し戻ることになるが)、弱者や敗者に  
 対する同情やひいさばが判官びいさばなら、日本  
 人の心理の中には、その対極として「勝つば  
 官軍」的なものもあるのではないかというこ  
 とが、論点とされねばならないだろう。勝者  
 強者をよしとする態度、いまや時代遅れのモ

のとなつてしまつたが、"巨人、大鵬云々"  
という卑近な言ひまわしか"見事"に言い当てて  
いた心性である。

この「勝てば官軍」の思想の根拠の一つは、  
これもすでに指摘されてゐることだが、次の  
事實に求められる。つまり、日本では、常に  
権力と道徳が結びついていた。勝敗が、その  
また善悪に結びつくのである。世俗的成功者  
=精神的優越者という図式が成り立つという  
事實のうちにである。「通俗道徳」の場合にも

世俗的成功者が、道徳的優越者であるといふ  
とらえ方はあつた。

こう考えこくると、「判官びいき」か「勝  
てば官軍」かという問題の立つ方は、ふたし  
いもののように思われる。日本社会を伝統的  
に貫いてゐる支配原理は、むしろ「勝てば官  
軍」の論理であつて、「判官びいき」といふ  
のは、そうして圧倒的な力に対するはかなひ  
抵抗にすぎず、しよせん"引かれ者の小唄"  
とかかるとこゝろのないものだといふことにな

る。自己の無力感に伴う心情を、悲劇のヒーローに託して、カタルシスを感じていくにすぎないことになる。

「判官びいき」は、そのマゾヒズムでしかないだろうか。そこに何らかの積極的意義を見出すことはできないだろうか。上のような断定によって「判官びいき」を葬り去ってしまうのは、あまりにも問題が多いような気がする。

むしろ、こうした単なる「感想」を述べ

ることは無意味で、このこと自体が一つの心情にすぎない。まさに「判官びいき」的心情そのものだといってしまうかもしれない。

しかし、もし「判官びいき」が、日本人の心理的伝統の流れの中に大きな位置を占めるとしたら、その事実を正當に評価しなければならぬ。そして、「判官びいき」の中に庶民・大衆の心情の健康なバランス感覚、支配的論理に対するチェックの機能をみることはいまではないか。

以上、いくつかの具体的トピックをとりあげ、日本人の国民性論の具体的論点として検討してきてののだが、現段階で我々にできることといえは、この種の個別の研究をいくつかつみあげていくこと、それらを真の意味での比較文化の枠組の上に乗せていくことだと思われる。そして、そのためには、社会心理学の流れをたどるといふタテの歴史的考察でそれらを裏打ちしなければならぬというこ

とである。

また、日本人と日本文化について論じる場合には、〈外からの眼〉〈内からの眼〉〈比較の眼〉という三つの視点が「必要だ」といわれている。これらの三つの視点の統合されたものが理想的アプローチであることは、いうまでもない。しかし、ここでは、我々がとりうる現実的な方向について考えたい。

例えば、本稿では、ほとんどとりあげることのなか、民俗学の成果というものは、この

〈内からの眼〉：内からの視点が生んだものともすじれた産物であるが、これらの業績を社会学なり社会心理学の枠組やチームでとらえ直していくということは、今後とるべき方向となるのではなかろうか。

また、もはや古典的な国民性研究にとらわれる必要はなく、我々のなすべき、また可能な方法は、より限定されたテーマによる比較文化的 (cross-cultural) の研究であることはいうまでもないだろう。差異と類似、特殊

と普遍を明らかにするという困難な課題は、ナイーブではあるが、同時にオーソドックスな“比較”という方法によつて明らかにされるからである。



<注>

〔1〕今回取り上げるものは、人間関係にまつわるナマのことはというよりも、一旦論者の検討のプロセスを経た提示されたものが中心である。これとは別に、人間関係にまつわる慣用語や独得の言いまわしを手がかりにして、日本的人間関係の特徴にせまることか可能ではないかと考えている。種々？ラッ？形で口あるが、筆者は、「記者席」(朝

日)「政界メモ」(読売)等のコラムの内容分析を試みたことがあろうが、そこには、カオ(カオを立てる、カオをフバす)、スジを通す、ナレナイ、ネマワシ、ミスに流す等のことばが多くみられる。これらのより精密な分析により、日本の政治風土、政治文化の特徴とともに、日本的人間関係のある側面を鮮明に浮き上がらせることができようのではないかと思う。何故なら、政治

の世界には、紀律培養的に、ある種の人間関係が温存されているからである。  
 [2] この他にも多くの検討すべき事項は残っており、選択の恣意性が問題とされるかもしれない。例えば、義理・人情、恩に関するものの脱却等。しかし、これらのテーマについては、各論として詳細な検討がなされてきている。(桜井庄太郎(1971)、源了圓(1969)等) また、今までの議論のまとめとしては

安田(1974)が有益である。) ここでは、いわば結論のレベルで、特に集団構成の原理という問題に比較的關係の深いものを選んだ。

[3] 「夕テ社会」ということは、中根の「日本の社会構造の発見」(『中央公論』1964.5)で、はじめにつかわれたことばだが、同様の指摘が、他に全くなかつたわけではない。先にふれたクランクホーンも、人間関係には、

linear 型(上下関係を重んずる型)、  
collateral 型(横の関係を重んずる型)  
individualistic (個々人を重んずる型)  
の3つがあり、日本は linear 型の典型  
だとしている。

[4] 社会的タイプ (social type) というのは、クラックホーン独自の概念といってもいいだろう。彼によると、それは次のようなものである。「ある特定の集団に、形成され、使用される役割行動の集

合的規範 (collective norm) ; 人がいかにあるべきか, あるいは, いかに行動すべきものと期待されてくるかについての理想化された概念 (p. 11)

[5] 英雄は, 賞賛され, <sup>モデル</sup>模範として積極的肯定的に選びとられ, 模倣しようとする。一方, 悪漢, 阿呆は, 共にネガティブなモデルとして, 前者は, その悪が恐れられ, 嫌われ, 後者は, その愚かさか, あざけりの対象にされるか

らである。

[6] このうち, さらには 1) Winners は, strong man, brain, smart operator, great lover  
3) Heroes of Social Acceptability は pin-ups, charmers, good fellows, conformers (moralists, smoothies) 5) Group Servants は, defenders, crusaders, martyrs, benefactors のサブカテゴリーを含んでいる。

[7] 具体的には, 次の50名である (表-2)

今回の調査でとり上げられたのは以下の50名がある  
 アラントロン, アルセ-ヌルパン, アルカポネ, アレキサンダ  
 大王, 石川五右衛門, 市川房枝, イエス・キリスト, 江川卓  
 大石内蔵助, 小沢征爾, 大久保清, 吉良上野介, 千尋  
 コロンボ, ケネディ大統領, ニヨカリ君, 西郷隆登, 坂本  
 竜馬, 三億円事件犯人, シーガー, シャイロック, ジャンヌ・ダ  
 ルク, シェンバイツァー, シューケン(萩原健一), 貴の花  
 武見太郎, 入道治, 田中角栄, 田沼意次, チャップリン  
 デヴィ夫人, 徳川家康, 豊臣秀吉, ナインゲール, 長島  
 茂雄, ナポレオン, ニ宮尊徳, 野口英世, ビートルズ,  
 ヒットラー, ベートーヴェン, ヘレン・ケラー, ホーミン  
 林久統領, マルクス, 三島由紀夫, 美空ひばり, 源  
 義経, 毛沢東, リンカーン, ルパン三世 (50音順)

表 - 2

[8] 各々の単純集計の上位20名を示すと次

に示す表 - 3 の通りがある。

英名	N	%	漢名	N	%	阿名	N	%
1. ナポレオン	155	(69.0)	1. 大久保清	200	(74.6)	1. 大久保清	106	(39.6)
2. アレキサンダー	160	(59.7)	2. レットラー	134	(50.0)	2. ニヨカリ君	100	(37.3)
3. アルパン	147	(54.9)	3. アカポネ	132	(49.3)	3. 田中角栄	97	(36.2)
4. 坂本竜馬	144	(53.7)	4. 田中角栄	94	(45.1)	4. 美空ひばり	86	(32.1)
5. リンカーン	138	(51.5)	5. 吉良上野介	79	(29.5)	5. 三島由紀夫	71	(26.5)
6. 西郷隆登	135	(50.4)	6. 林久統領	70	(26.1)	6. デヴィ夫人	70	(26.1)
7. J. ダルク	133	(49.6)	7. 石川五右衛門	70	(26.1)	7. レットラー	50	(18.7)
8. シーガー	128	(47.8)	8. 田沼意次	69	(25.7)	8. 林久統領	44	(16.4)
9. ケネディ	118	(44.0)	9. 三億円犯人	54	(20.1)	9. 江川卓	42	(15.7)
10. ベートーヴェン	109	(40.7)	10. 徳川家康	53	(16.0)	10. シューケン	30	(11.2)
10. 豊臣秀吉	109	(40.7)	11. アルパン	42	(15.7)	11. 吉良上野介	28	(10.4)
12. シェンバイツァー	102	(38.1)	12. シャイロック	33	(12.3)	12. ルパン三世	27	(10.1)
13. 徳川家康	96	(35.8)	13. 武見太郎	31	(11.6)	13. 入道治	25	(9.3)
13. 三億円犯人	96	(35.8)	14. デヴィ夫人	24	(9.0)	14. 石川五右衛門	20	(7.5)
16. 大石内蔵助	89	(33.2)	15. 美空ひばり	24	(9.0)	15. 貴の花	19	(7.1)
16. ナインゲール	87	(32.5)	16. ナポレオン	23	(8.6)	16. ナポレオン	17	(6.3)
17. 源義経	85	(31.7)	16. 豊臣秀吉	23	(8.6)	17. 長島茂雄	16	(6.0)
18. 長島茂雄	82	(30.6)	18. ルパン三世	21	(7.8)	18. 武見太郎	15	(5.6)
19. 毛沢東	80	(29.9)	19. アレキサンダー	15	(5.6)	19. シヤイロック	14	(5.2)
19. ルパン三世	80	(29.9)	20. シーガー	14	(5.2)	19. 豊臣秀吉	14	(5.2)

Total N=268

表 - 3

表-3 (単純集計による上位20名) →73

Total N=268

スター		尊敬の人	
	N %		N %
1. A. ドロン	242 (90.3)	1. ヘレン・ケラー	155 (57.8)
2. シューゼン	213 (80.2)	2. 野口英世	151 (56.3)
3. ビートルズ	198 (73.9)	3. シェンバイツァ	150 (56.0)
4. チャップリン	194 (72.4)	4. ナイテングール	140 (52.2)
4. 長島茂生	194 (72.4)	5. ニ宮尊徳	106 (39.6)
6. 貴の花	176 (65.7)	6. イエス・キリスト	66 (24.6)
7. 刑事コロンボ	173 (64.4)	7. 子鹿岡犯人	64 (23.9)
8. 美空ひばり	130 (48.5)	8. リンカーン	61 (22.8)
9. ルパン三世	103 (38.4)	9. 市川房枝	60 (22.4)
10. 子鹿岡犯人	96 (35.8)	10. ベートーヴェン	57 (21.0)
11. こまわり君	92 (34.3)	11. ケネディ大統領	54 (20.1)
12. 江川 卓	86 (32.1)	12. チャップリン	53 (19.8)
13. デヴィ夫人	82 (30.6)	13. マルクス	48 (17.9)
14. 三島由紀夫	63 (23.5)	13. 大塚 治	48 (17.9)
15. 小沢 征爾	59 (22.0)	15. ルパン三世	39 (14.6)
16. 石川五右衛門	35 (13.1)	16. 毛沢東	32 (11.9)
16. ケネディ大統領	35 (13.1)	17. ホーミン	31 (11.6)
16. ベートーヴェン	35 (13.1)	17. ビートルズ	31 (11.6)
19. 源 義経	34 (12.7)	17. J. ダルク	31 (11.6)
20. A. ルパン	32 (11.9)	17. A. ルパン	31 (11.6)
20. 石内 嘉助	32 (11.9)	17. 長島茂生	31 (11.6)

第三章 引用文献及び主要参考文献

荒木博之 1973 『日本人の行動様式』

講談社

Barnland, D. C. 1973 Public and

Private Self in Japan and the

United States (西山千詠『日

本人の表現構造』サイマル出

版会 1973 )

Benson, L. 1974 Images, Heroes and

Self-perceptions: the search

for identity from mask-wearing  
to authenticity, Prentice-Hall Inc.

藤岡喜愛 編 1974 『続・人間と吾え  
る』 II 社会思想社

深作光貞 1971 『日本文化および日本人  
論』 三一書房

Hall, E. T. 1959 The Silent Language  
(国弘他訳 『沈黙のことば』  
南雲堂 1966 )

石川弘義 1971 『欲望の戦後史』 弘文

堂書房

板坂元 1971 『日本人の論理構造』  
講談社

神島二郎 1961 『近代日本の精神構造』  
岩波書店

加藤秀俊 1961a 「われわれはなぜ話さ  
ないか」 『言語生活』 11月号

————— 1961b 「非言語的コミュニケーションの問題」 『思想』 11月号

—— 1966a 「コミュニティとつちあ

ひ」『コミュニティ』No.8

—— 1966b 『近代日本の名著13

日本文化論』徳間書店

—— 1973 「日本文化とコミュニティ-

ション」(講座『現代の社会

とコミュニティ-ション』5 情

報と生活』東大出版会 所収)

加藤 周一 1956 『雑種文化論』講談

社 (講談社文庫版 1973)

—— 1972 「内コミと外コミの問題

』『世界』1月号

唐沢富太郎 1964 『理想の人間像』中

央公論社

河原 宏 1971 『西郷伝説』講談社

川島武宜 1950 『日本社会の家族的構成』

日本評論社

Klapp, O. E. 1948 "The Concept of

Popular Heroes" American

Journal of Sociology Vol. 54

喬  
大  
学



———— 1949 "The Fool as a Social Type", A. J. S. Vol. 55

———— 1956 "American Villian-Types." A. S. R. Vol. 21

———— 1958 "Social Type: Process and Structure" A. S. R. Vol. 23

———— 1960 Collective search for Identity, Holt, Rinhart & Winston Inc.

———— 1962 Heroes, Villians and

Villians, Prentice-Hall Inc.

———— 1964 Symbolic Leaders: Public Dramas and Public Men, Aldine Publishing Co.

Kluckhohn, F. 1950 "Dominant and Substitute Profiles of Cultural Orientations: Three Significance for the Analysis of Social Stratification" Social Forces Vol. 28 No. 4 pp. 376 - 393

————— 1953 "Dominant and Variant  
Value Orientations" in C. Kluckhohn  
& H. Murray (eds.) Personality  
in nature, society and culture.  
Knopf pp. 342-357

丸山真男 1961 『日本の思想』岩波書店

増田義郎 1967 『社弊文化の条件』講談  
社

南 博' 1953 『日本人の心理』岩波書  
店

南 博' 1957 『体系社会心理学』光文社

源 了圓 1969 『義理と人情』中央公論社

見田宗介 1967 『明治維新の社会心理学—  
民衆の対応様式の諸類型—』

(『変動期における社会心理学』

培風館 1967 所収)

————— 1971 『現代日本の心情と論理』

筑摩書房

中根千枝 1967 『夕テ社会の人間関係』

講談社

尾崎秀樹 1966 『英雄・その歴史の謎』

三一書房

—— 1968 『英雄伝説』 徳間書店

斎藤正二 1972 『やまとたましいの文化

史』 講談社

桜井庄太郎 1971 『名誉と恥辱』 法政

大学出版社

作田啓一 1967 『恥の文化再考』 筑摩

書房

—— 1972 『価値の社会学』 岩波書店

佐藤 毅 1963 「コミュニティー-シヨニ社会

学の問題」(『現代コミュニティー-

シヨニ講座』IV 『コミュニティー-

シヨニの社会学』有斐閣所収)

—— 1972 「日本人のコミュニティー-

シヨニ」(『社会学セミナー4

社会心理・マスコミュニティーシ

ヨニ』有斐閣所収)

佐藤忠男 1958 『裸の日本人』 光文社

世良正利 1962 「日本人におけるコミュニ

ニヤ-シヨ-ノ問題」『年報社

会心理学』 Vol. 3

—— 1963 『日本人のパーソナリテ

イ』 紀伊国屋書店

祖父江孝男 編 1971 『日本人 』の構

造分析』 現代のイスプリ

至文堂

—— 編 1973 『日本人は どう変

ったか』 現代のイスプリ

No. 69 至文堂

多田道太郎 1973 『しごの日本文化』

筑摩書房

高島素之 1930 『英雄崇拜と看板心理』

忠誠堂

高橋富雄 1966 『義経伝説』 中央公論社

統計数理研究所 1961 『日本人の国民性』

至誠堂

—— 1970 『第2日本人の国民

性』 至誠堂

—— 1975 『第3日本人の国

民性』 至誠堂

辻村 明 1968 『日本文化とコミュニケーション』

日本放送出版協会

和歌森太郎 1966 『義経と日本人』 講

談社

1972 『日本史の虚像と実像』

毎日新聞社

上山春平 1967 「日本文化の波動」

『Energy』 No. 15 (梅棹・

多田編 論集・日本文化1『日

本文化の構造』 講談社 1972

(に再録)

—— 1971 『日本の思想 — 土着と

欧化の系譜』 サイマル出版会

安田三郎 1974 「義理について — 日本

社会ノート(1)(2)」 (『現代

社会学』 Vol. 1, 2 講談社

所収)

安丸良夫 1974 『日本の近代化と民衆思

想』 青木書店

米山俊直 1971 「日本の社会関係におけ  
る〈基本的概念群〉」『季刊人  
類学』2-3 社会思想社

あとがき

ある人に言わせると、~~修論が~~、もし全力投  
球の直球だとするのなら、単位修得論文は肩の  
力を抜いたスロウ・カーブだという。確かに  
両者の性格の違いを言い当てたうまいといえ  
だと思ふ。しかし、むしろん問題は、ストウ  
イックをきめらぬかどうかということである。  
そういう意味からするのなら、今回の「論文」  
は、きわめて不本意なものだ。論文に

は、問題提起型、問題整理型、問題解決型と  
 いふ三つのタイプがあると思われ、もちろん、これらの三つが統合されたものが理想的な型ではあるが、そればかりでも“理想”なのである。本稿もその例にもれず、せいぜい第二のレベルにとどまっていた。あまりにも大なる問題、多くの問題とかがえこんでしまつたため、再整理、再検討の作業も容易ではなかつた。全体の議論が、総花的、一般的なものになり、“食いついてない”ところがあ

るのはこのためである。  
 また本稿には、国民性論か、社会心理史からには、国民性論か、「国民性」論か、あるいは「国民性論」論かといういくつかの問題が重層的に含まれている。筆者自身は、むしろこのことのうらに積極的意味をもたせたいつもりであるが、この“欲ばった”アプローチが議論にあまりいさゝか加えていないかもしれない。  
 しかし、それにしては何というおいたたし

い量の日本人論、日本文化論であるのか。文字通り書棚は、これらの書物で埋まり、こぼれた。それは一種壮観ななかめでもあり、この山の前には、もはや説明を加えることもむなしいかのようであった。これらが、何よりも事の本質と雄弁に語り、こぼるからである。

また、こゝでは、その目的上、なるべく、ピョートルの日本人論、日本文化論と対象に選んだ。その中には当然評論的、ジャーナリスティックなものも多い。そのため、どうして

も、それらの対象に引寄せられるというところからは自由ではなかつた。本稿の調子やなかにはそういうものがあるといへば、それはその影響である。しかし、本文でも述べたように、本稿のような目的の場合には、そうしたものをまともにとりあげ、付与合、つくることが積極的な意味を持つてくるのである。

また、これも本文で述べたように、本来「社会心理」というものは、ドドドとした不定形のとらえにくいものである。そして何より



も“俗、卑しい”ものなのだ。流行のゲーム  
 になりうらに、社会心理の反映をみてもこう  
 というのは、あまりにも素朴な方法のように  
 思われるかもしれないが、それらをとらえて  
 いくには、こうした段階も、踏まねばならぬ  
 ワンステップなのである。問題は、それらを  
 いかにか精巧なものと対立させてあげていくかとい  
 うことである。粗いデッサンも、美しい絵に  
 なる可能性はある。